

## 廣井勇博士遺芳

『秋冷の候御壯榮奉賀候(中略)此正月には岡崎文吉氏が又先月は眞島健三郎氏が訪れて呉れました、私の聲が癒つた譯では御座いませんが……一日對座しました』云々として十川嘉太郎氏から次の文を寄せられたのは昨年十月であつた。公表すべきものに非ず讀後破りする様との添書であつたが、傳記にも載せられなかつた故廣井勇先生の逸話であるから先生の逝去後滿三年の今月を追憶するに相應はしく思ひ特に港灣工事號の巻頭に掲げる事にした。十川氏の御來意に反した點は幾重にも御許を乞ふ。

(岡崎生)

~~~~~□~~~~~□~~~~~□~~~~~□~~~~~

先生は模倣を賤しめ、オリジナリティーを尊まれました。先生は『今時鐵道なんて誰でも出来る、築港には未解決の事項が多く、而して今後の日本の開發には是非必要だ』と申された事を度々伺ひました。そんな御意見から先生は鐵道の招聘には應ぜられず築港に主力を注がれたのです。而して先生は日本幾多の築港事業に關係せられ、築港界に多くのオリジナリティーを残して逝かれたのです。

大正十年頃私はまだ今日ほどの聲でございませんで、所々の仕事を頼まれて居ましたが、或時、或人からの頼みで先生に従つて某調査に従事しました。歸り途福岡市菜屋に先生と同宿しました夜、小生は外出して歸り見れば、先生は専心袖珍聖書(英文)を讀んで居られました。私が『先生は旅先でも聖書讀みを廢されませんか』と尋ねましたら、先生は『僕は一日でも聖書讀みを缺かした事はない、其代り一度に多量な讀まぬ』と申されまして、私は今更ながらと教へられました。

その翌朝の話に先生は海外巡禮の話から、『ドイツ大學の昔の教授で今尙矍鑠として橋梁理論に没頭してゐる人がある、西洋人には體力から及ばぬ』と嘆ぜられました、而して此が先生と私との最後の同席で御座いました、今尙忘れ兼ねて居ります。

土木工學會誌の最初の編纂は先生がせられました私に何か書いたものはないかと申されましたので、私は一寸としたものを出しました。先生は賛成だと申され第二號に掲載されました所が、未知の内務省の原田博士外一二人の方から度々駁撃されました。其後私が病を得て轉居しました。住居は丁度原田博士

の住居の後でした。こんな事から博士に御知合になりまして、今でも原田博士に御會ひする時は廣井先生を連想致しまして、まことに奇縁だと思つて居ります。

明治三十七年頃かに私が小樽築港に見學に参りました節、先生は工事場に於て話されました『労働者は日曜日には仕事を軽減すると良いが、彼等は暇さへあれば、イタツラばかりして仕様がなから、確り働してやる』と。先生は口ばかりの道徳者を非常に忌み嫌はれました。

先生の逸話の石狩川改修の話がありましたが、先生は物事を成立させる苦心を尊まれました。先生は常に申されました『君あのスエズの運河など工事は大した事はなけれど、之を成立させたレセツプの苦心と云ふものが大したものだ。此丈の苦心がなければあのスエズ運河は出来なかつたであらう。工事者は設計以外に此苦心を忘れてはならぬ』と教へられました。先生は又常に『人間は五十圓あれば生活出来ん事はない、生活費の事を恐れて、自分の仕事を粗末にする様な事があつてはならぬ』と教へられました。

乃木將軍の自殺の事に就き世論紛々たりし際先生は『人間は死を決して正しくしたる事に悪い事のあらう筈がない、決死の時ばかりに眞面目だから決して誹議すべきものでない』と教へられました。

私は先年、先生の御紹介でコロンビヤ大學でプロフェッサー・バーに遇ひまして、色々御世話になりました、其節教授は先生に敬服して居られまして、終りに私の最も舊い友達の一人なりと附け加へられました。昨年バー教授が東京へ御出になりましたが、先生既に逝かれて残念な事でしたらう。

先生の御死去の時は私は上京中で御座いましたので、告別式の日、會葬者より先に御挨拶を申し上げ、式の時妻と俱に玄關先の雨具番をさせて頂きました、多くの方は御存知なく御通り過ぎになりました、中山博士も直ぐ傍まで御出でになりました、私も高聲に話すべき場合でないで遠慮致しました、然し妻は博士に外套を御着せ申しました、先生はよく『中山君は弱くて本當に氣の毒だ』と申されたのを聞いて居ました。強い筈の先生が弱い博士に送られた譯で今更ながら人事の變化に感慨無量でした。